

# 新庄遺跡掘立柱建物跡 S B 5303 をめぐって

辻本和美

## 1. はじめに

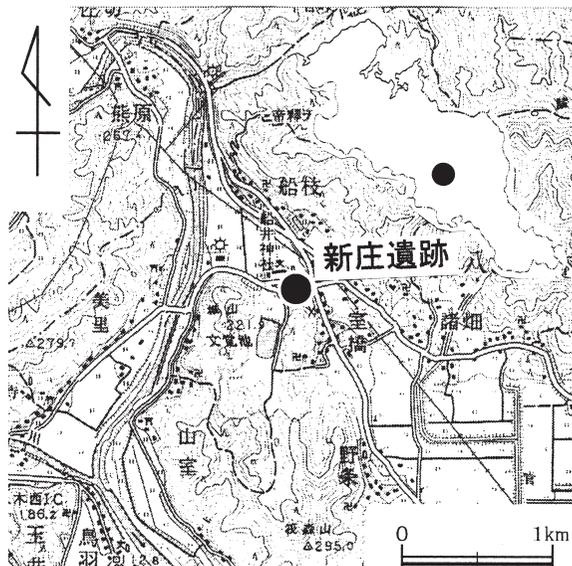
新庄遺跡は、亀岡盆地の北端にあたる京都府南丹市八木町室橋に所在する古墳時代から中世に至る集落遺跡である。平成20年度に遺跡範囲内で、ほ場整備事業が計画され、当京  
都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査<sup>(注1)</sup>を実施した。

発掘調査は4箇所の地区に分けて行い、3区と呼称した地区から1棟の掘立柱建物跡(S B 5303)を検出した。この建物跡は、周囲を塀または柵列によって取り囲まれた2間四方の総柱建物で、鎌倉時代に建てられたものと想定した。

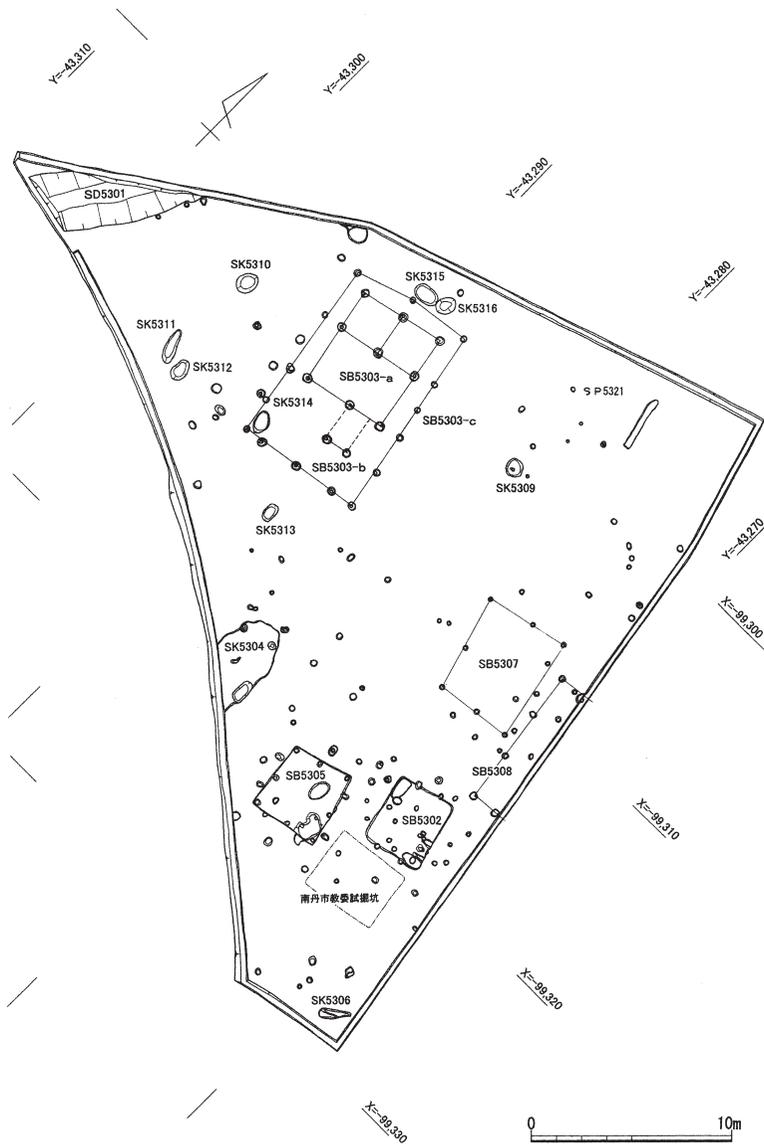
調査を進めて行く段階で、中心となる建物が前記のように柵か塀に囲まれた狭い空間に配置されていること、本建物の近辺に他の建物が存在せず、閑居地を選んで建てられているように思われる等から、村内の通常の住居ではなく、火災の延焼を防ぐために住居から隔てて置かれた倉あるいは祭祀に係る非日常的な建物の可能性を考えた。今回、再度この建物跡をとりあげ、その性格等について考えてみたい。

## 2. 掘立柱建物 S B 5303 の平面形態について

本建物跡は、東西2間(4.4m)×南北2間(5.2m)の規模をもつ総柱の掘立柱建物跡(S B 5303-a)である。建物跡の正面と思われる南側には階段等の施設に関連するものとみられる2基の柱穴が並んで遺存する。さらに建物の周囲を取り囲む形で、塀または柵と思われる掘立柱穴が巡る。また、建物全体を構成するそれぞれの柱穴群は、それぞれ柱筋を通しており全体の



第1図 新庄遺跡調査地位置図



第2図 3区遺構配置図

企画性が窺える。中心建物跡S B5303-aの方位は、南北軸から西側に約10度の角度で振る南北方位を示している。中心建物跡の周囲には不整形の土坑が9基分布する。このうちの幾つかは中世に所属するものと思われるが、時期・性格については不明である。調査地の西側には2棟の掘立柱建物跡が存在する。中世に属するものと思われるが詳細は不明である。南東側に位置する2基の建物跡は、奈良時代に属する、土間をもつ半地下式の掘立柱建物跡で、日常の住居とみるより工房としての性格が考えられる。

次に、掘立柱建物跡S B 5303-aの平面構造について今少しふれてみたい。

掘立柱建物跡S B 5303-aの柱掘形の平面形は、円または隅丸方形状で直径約40～50cm、深さ50cm前後を測る。これに対し周囲の柱列の柱穴はやや小ぶりで、径約30cm、深さ約40cmを測り、平面形は円もしくは楕円形を呈する。掘形内に柱の痕跡を残すものでは、径約20cm前後を測る。柱穴の検出状況からは建て替え等の跡は認められなかった。検出面は後世に水田等の造成により多少の削平を受けているものと思われた。

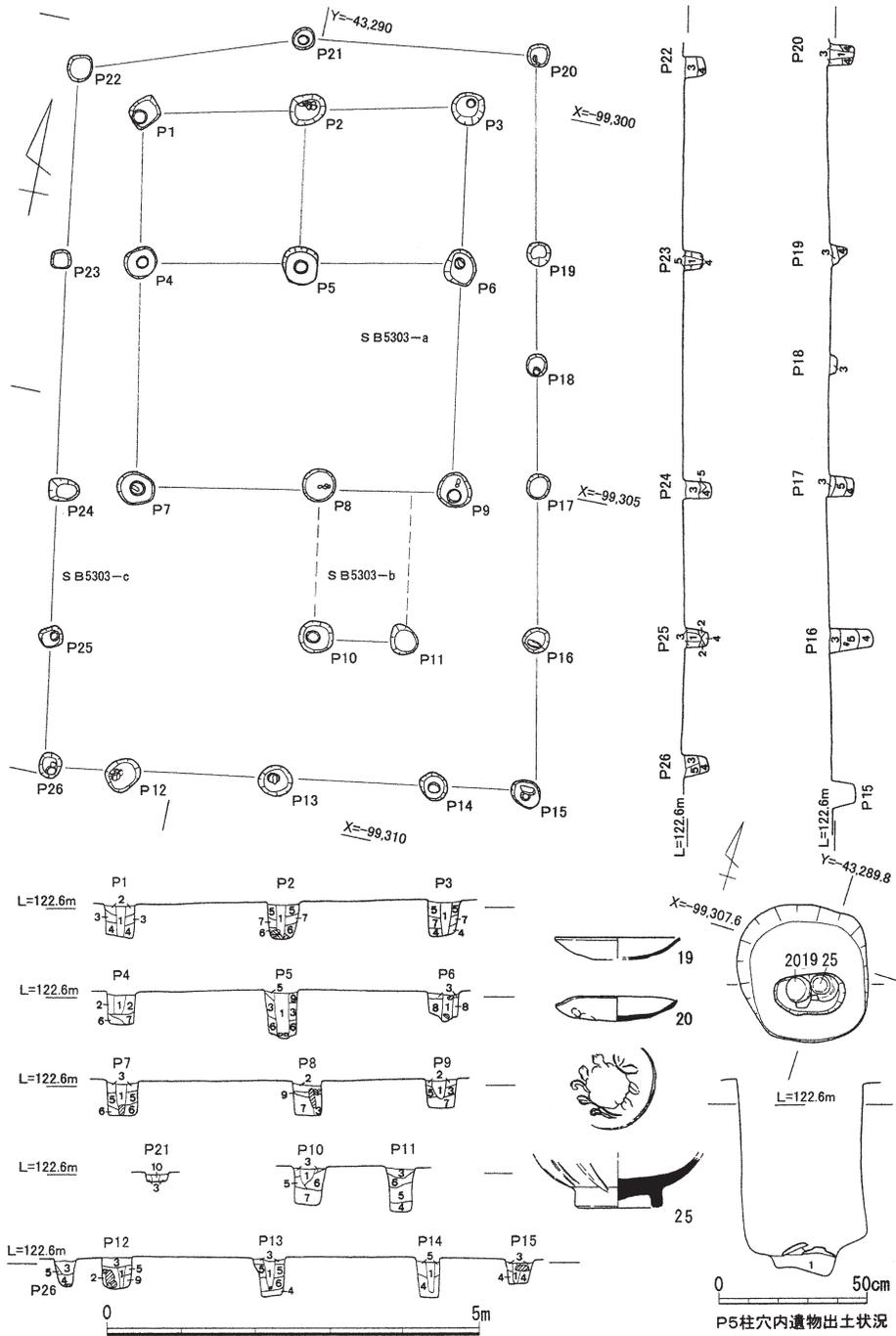
検出した柱穴はそれぞれ通し番号を付して記述する。建物跡S B 5303-aを構成する9基の柱穴は、北西角P 1から南東角のP 9にいたる番号を付した。各柱穴の間隔は、北側柱列(P 1 - P 3)と中央柱列(P 4 - P 6)では平均2.2mを測るが、南側柱列では2.4m(P 7 - P 8)と1.8m(P 8 - P 9)となりやや不揃いである。南北方向の柱列の間隔は、おのおの2.1m(P 1 - P 4とP 3 - P 6)と2.9m(P 4 - P 7とP 6 - P 9)で南側一間分の柱間隔が少し長い状況を示している。つまり南側柱列の間隔が揃わないことから、北側柱P 2と中心の柱P 5を結んだ中央南北の柱筋上に南側柱P 8が乗らない結果となる。

建物跡S B 5303-aの柱穴の掘形内には礫石を入れるものがある。礫石については、検出状況からみて柱の底部に据えた根石とみるより柱埋設に際し周囲の根固めに利用したものと思われる。

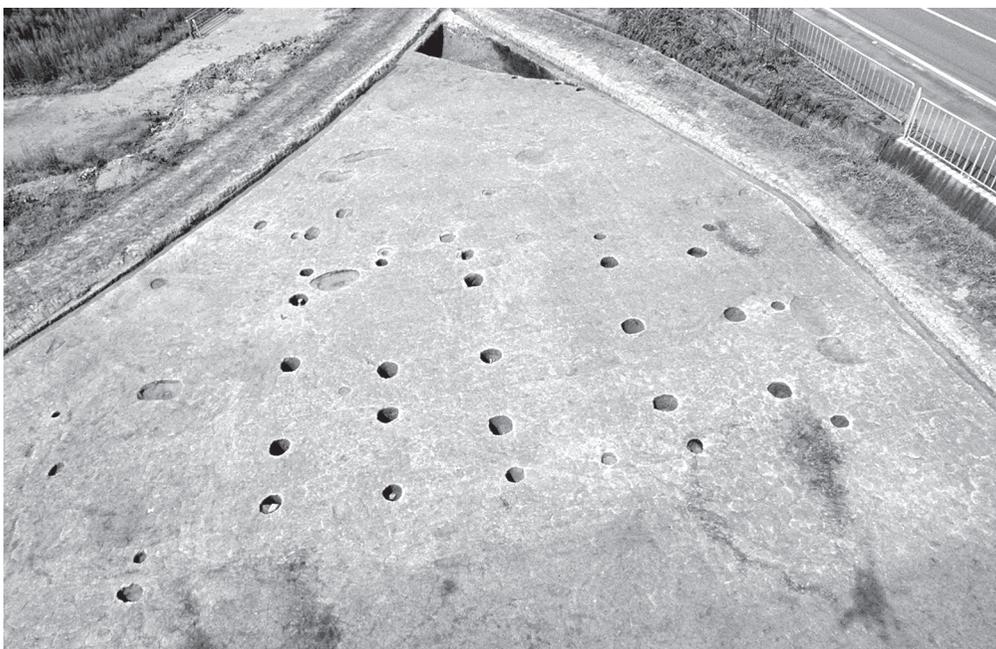
中心柱であるP 5は、長径45cmを測る歪な円形を呈し、深さは約60cmで他の柱穴に比べて深く掘られている。P 5の掘形内には径20cm前後の柱痕跡がみられ、掘形の埋土から少量の炭片が出土した。さらに、この掘形の底部に長軸約25cm、短軸約15cmの楕円形で深さ5cm程の小土坑とも言うべき一段深い穴が掘られていた。この坑内から、青磁碗片2点と土師器皿3点が出土した。このうち青磁碗片の一点は底部を上に向け、これに土師器皿が重ねられた状態で置かれていた。坑内は黒色粘土によって充填されていたが土器類以外に遺物はみられなかった。

上記建物跡の南側には1.2mの間隔を置いて2基の柱穴(P 10・P 11)が並ぶ。柱穴P 10は建物跡南側柱列のP 8から2m南側に離れた延長線上に位置する。柱穴の形状や規模は、中心建物跡の柱穴と類似する。この2基の柱穴は位置関係からみて階段の下端を支える柱と考えられるが、あるいは階段上部にかけられた庇(向拝)の端を支える柱の可能性も考えられる。このように復原すれば柱穴P 10とP 11の間(幅1.2m = 4尺)が建物への出入口になり、中心建物に付属する施設(S B 5303-b)の存在が想定できる。

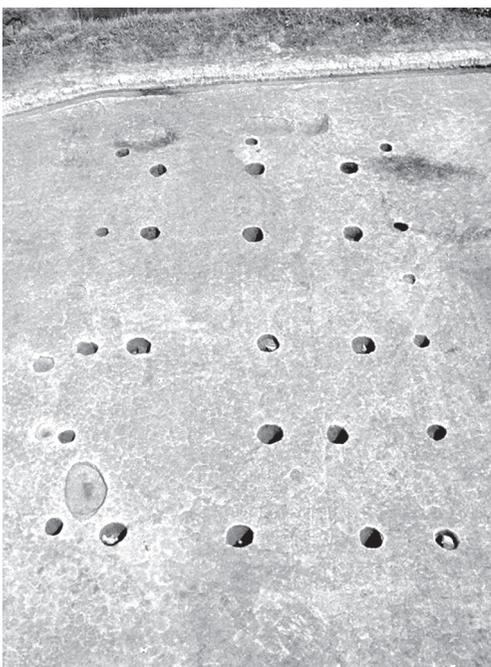
中心建物跡S B 5303-aの周囲には、これを取り囲む形で合計15基(P 12～P 26)の柱穴が列状に並ぶ。これらは中心建物跡の四周を囲む塀または柵と考える。このように塀または柵であるなら遺構番号としてはS Aの記号を用いるべきであるが、当初は検出した柱穴全



第3図 掘立柱建物跡S B 5303



掘立柱建物跡S B 5303(東から)



掘立柱建物跡S B 5303(南から)



掘立柱建物跡S B 5303柱穴P 5  
底部の土器埋納状況(南から)



置ることや、他の柱穴に比べて規模が大きいことから塀または柵の間に設けた出入口に伴う木柱とも考えられる。形状としては冠木門もしくは鳥居的なものが想定される。ちなみに、この南面柱列と先にふれた階段状施設S B 5303-bの間隔は1.9mを測り、階段部分の張り出し部の長さ2mとほぼ等しい。

東側列の柱穴P 18は掘形が浅く他の柱穴と異なった印象を受ける。現状では柱穴P 17とP 19の柱の中間に位置することから、両柱間の補助柱としての機能をもつものと考えておきたい。

ここまで中心建物跡S B 5303-aを取り囲む柱列を柵または塀としてきたが、建物跡S B 5303-aの南側柱の柱穴P 7とP 9を結ぶ線より北側に位置する柱穴列(反時計回りにP 17～P 24)を、先にふれたように建物跡S B 5303-aの東西2辺・北辺の縁側柱とみる復原も考えられる。このうち北側柱列中央の柱穴P 21は、北西角の柱穴P 20と北東角の柱穴P 22を結ぶ線から14cm程北側(外側)に突出した位置にあることが注意される。中心建物跡S B 5303-aの中軸線を通ることから、柱穴P 21を中心建物跡からのびた棟の支持柱とする復原案もあるが、建物南側には無くその可能性は低いものと思われる。

次に出土遺物についてふれておきたい。建物跡S B 5303-aの中心柱P 5から出土した中国製青磁椀2点はいずれも底部の破片で、接合しない別個体である。高台を有し、内面見込み部に印刻花文、体部外面に蓮華文を施すもので、色調は薄緑灰色、底部高台内は無釉である。土師器皿3点は口径8.0～8.3cmを測る。所属時期は概ね13世紀末葉から14世紀に比定できる。このほかの柱穴P 7とP 16から中国製青磁椀の口縁部片が各1点出土しており、接合することが分かった。なお、北東角の柱穴P 20の掘形埋土から奈良時代の須恵器杯底部片が出土しているが周辺遺構からの混入と思われる。

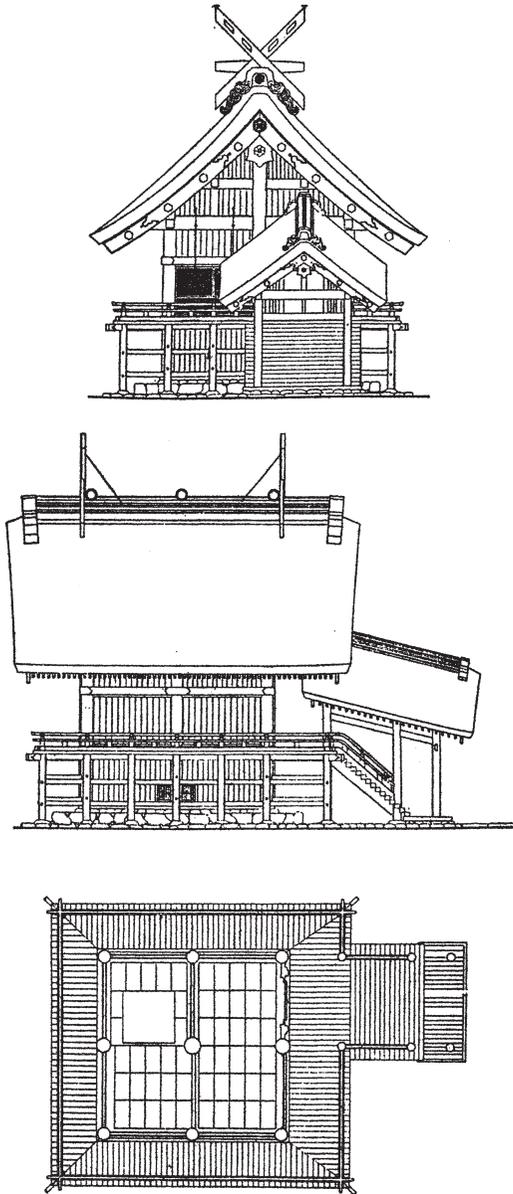
### 3. 建物跡の性格について

以上、復原案を交えながら建物跡S B 5303の概要を述べてきた。以下、本建物跡の性格について考えてみたい。

①建物跡S B 5303-aについては柱間隔が不揃いであり上部構造については不明な部分が多い。建物平面形は2間四方のやや南北に長い「田」の字形で、建物南面に東側(向かって右)に寄せて階段を付設する。

②柱掘形の規模が中世の建物跡の一般的な規模に比べ大きく、全体に計画された柱配置をもつ。

③建物跡S B 5303-aの中心柱P 5は、周囲の柱に比べて規模が大きく深く掘られている。掘形底部には地鎮に伴うと考えられる青磁椀・土師器皿が埋納されており、他の柱に比べ



第5図 出雲大社本殿実測図

とする想像力をかきたてる説もある。平成12年(2000)の境内での発掘調査で、鎌倉時代前半(13世紀)の宇豆柱の巨木が発見され話題になった。出雲大社の現本殿は、延享元年(1744)に改築されたものであるが、鎌倉時代以降については、規模や建築の細部は除いて平面の形式には大きな変化はなかったとされている。なお、現本殿の柱は耐久性を考慮し

て特別視されている。

④建物跡に伴う柱掘形はいずれも規模が大きく、これまで周辺の遺跡から検出されている中世時期の建物跡の柱掘形とは隔絶した規模をもつ。階段と思われる施設の存在からも床張りで、棟の高い建物像が想定される。

⑤中心建物の周囲には塀か柵を巡らしていたものとみられ、南側に冠木門あるいは鳥居状の出入口を開ける可能性がある。

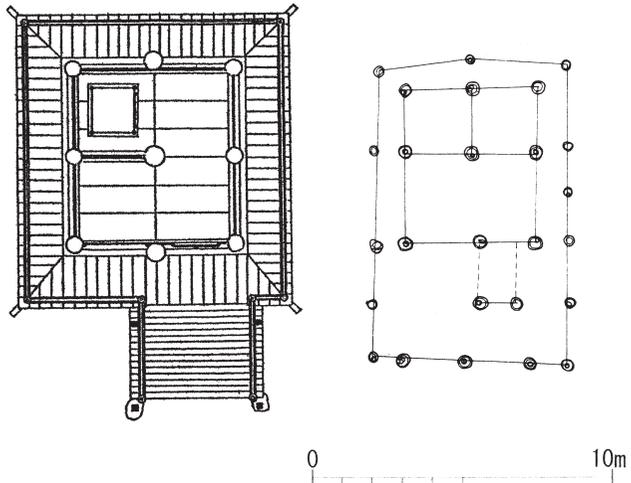
⑥中心建物前面の柵または塀に囲まれた空間は、狭いながらも儀式的場に使用されたものと思われる。

⑦出土遺物から本建物の建てられた時期は鎌倉時代後半と考えられる。建物の存続時間は、建て替え痕跡が認められないことから一代限りの比較的短かったことが想定される。

以上、項目のうち最初に挙げた①に注目すると、中心建物跡は、「田」の字形の平面プランをもち、切妻屋根の高床式建物形式の出雲大社に代表される大社造<sup>(注2)</sup>建築が類推される。

出雲大社の成立や社殿の変遷については数多くの論考があり、古代には高層建築の神殿が建てられていた

礎石の上に立てられているが、本来、掘立式が基本であった。現存する大社造に関しては、鳥根県松江市大庭町にある神魂神社が正平元年(1346)に造営され最古の大社造様式の神社建造物とされている。出雲大社本殿と比べると、規模は半分ほどで、平面形は正方形でなく奥行きが少し長くなっている。際だった特徴としては前後両妻の中央柱(宇



第6図 神魂神社本殿(左)と新庄遺跡S B 5303(右)の平面比較  
(S B 5303は付属施設を含む)

豆柱)がその両側の柱よりも太く、両側の柱よりやや外方に出ることである。これは出雲大社本殿よりも出かたが大きく古式を残すものとされている。ちなみに大社造の社殿平面形は「田」の字形を基本とするが、現存する社殿の分類等から、概ね階段部が右に片寄せた位置から中央部への移動、さらに中心柱の消失などの変遷過程が考えられている<sup>(註3)</sup>。

以上の点を踏まえ、新庄遺跡の建物跡S B 5303-aを比較検討すると、平面形が神魂神社と同様に奥行きが長い点があげられる。すなわち建物奥行きと幅の差は0.8m(約2.7尺)を測る。中心柱と背後の中央柱(大社造の宇豆柱)を結ぶ線が正面中央柱の位置から外れる点があげられる。平面の特徴が上部構造の細部にどのように反映するのか、不明である。このように建物内部の前と後で規模(スペース)に差違があるのは、前後の2室で使用用途が異なっていたからと想像する。

出雲大社本殿では、入口の正面にあたる心御柱と呼ばれる中央柱と右側の側柱の間に板壁が設けられ、この仕切られた空間の最も奥部(御内殿)に神座が横向き(西向き)に置かれている。

ちなみに、神魂神社本殿の規模は、正面1丈7尺(5.2m)、側面1丈9尺(5.8m)であるから、新庄遺跡の中心建物跡は正面で1m(3尺)、側面で80cm(2.3尺)ほど小さい

新庄遺跡の中心建物跡の顕著な特徴は、周囲に設けられた柵ないし塀が非常に接近して設けられていることである。コンパクトに限られた空間に押し込まれたような閉塞感を受ける。また、周辺には同建物の時期に伴う明確な建物跡がなく、単独で建てられたと思われる。これらは、生活の場と隔絶した空間を演出したものと想像する。

以上、結論として新庄遺跡の掘立柱建物跡S B5303は、文中度々ふれてきたように中世の神殿建造物跡として捉えておきたい。

中世の神社建築は現存するものが多数あるが、考古学の方面からの調査例は少ないのが現状である。神社建築は様々な建築様式をもち、時代によって変化と発展を遂げていくことが知られている。今後、これらの神社建築との比較検討によって考古学の面でも研究が進むことを期待したい。

#### 4. むすび

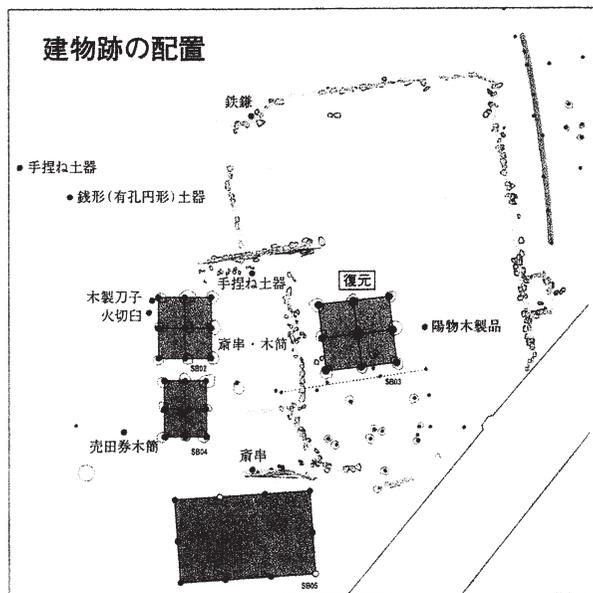
以下、神殿建物に係わる代表的な発掘調査例を紹介し拙稿の結びとする。

出雲大社がある出雲平野の北辺に位置する島根県出雲市の青木遺跡は、<sup>(注4)</sup> 弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。この遺跡からは、奈良時代後半から平安時代初頭頃に「田」の字形の9本の柱をもつ注目すべき掘立柱建物跡が数棟検出されている。一部の建物では中央の柱が他の柱より一回り太く、深く掘り込まれており、後世の神社本殿様式である「大社造」と類似することが指摘されている。建物の周囲には目隠し塀が設けられており、建物の隔絶性を思わせる。この建物跡の周辺からは、斎串や木製刀子形代・火鑽臼、土馬などの祭祀遺物と共に神祇祭祀に関する文字資料が出土しており、付近で祭祀儀礼が行われていたことが明らかになった。全国的にも神社社殿跡の発掘調査としては希有の例であり

神社建築の研究の上においても重要な資料である。

出雲大社のある山陰地方では、後世の「大社造」を想起させる掘立柱建物跡が、時代は弥生時代から中世を含むが現在100数基の例が挙げられるといわれる。その全てについて「後世の神社建築との系譜関係」を論じるのは早計とされるが、神社建築様式の起源と変容の過程を実証的に追求する作業としておおいに期待すべきものと評価されている。

また、青木遺跡は平安時代



第7図 青木遺跡の推定社殿遺構配置図

の神像1体が出土したことで有名であるが、2008年に滋賀県伊香郡西浅井町の塩津港遺跡から平安時代末期(12世紀)の神像5体が見つかり一躍脚光をあびた。

塩津港遺跡<sup>(注5)</sup>は、琵琶湖の最北端に位置する古代から近世にかけて北陸から畿内・京に向かう物資の積み替え港として栄えた湖上交通の港跡を中心に広がる遺跡である。この遺跡からは、平成18・19年度の調査で、平安時代後期の神社跡が調査されている。

神社跡は塩津港の入り口にあった中州上に造られており、約50m四方に区画された神域内に神殿、拝殿、門、鳥居、堀などの施設がみられる。堀内からは、多量の木製品とともに「起請文木簡」や神像が出土した。神社跡は第1神社と第2神社に分けられる。第1神社跡は50m四方の区画を堀で囲まれ、南側の中軸線上に土橋と鳥居を設けて入り口が造られている。この北側には拝殿と正殿の他、数棟の建物が存在しておりこの一角からは「神泉」と考えられる井戸も見つかっている。北側は堀に加え堀によっても区画されたことが判明した。神社の存続時期は、11世紀後半から12世紀にかけての約130年間と想定され、建物は当初掘立柱建物であったものが礎石建物に改築され、中心社殿は最終的に石組みの基礎をもつ建物に建て替えられていく変遷過程が明らかになった。建て替えに当たっては建物の規模・位置など当初とほぼ同じであったことが判明した。第2神社跡は、第1神社跡の南西に隣接する、同じく50m四方の堀で区画された施設で、12世紀に造られ第1神社と共存していたものと考えられている。なお、出土遺物の内容や遺構の状況が第1神社と異っており、前者とは違った祭事が行われたものと想定されている。

以上2例は周辺から神祇祭祀に関連する遺物が出土したことにより神社遺跡、神殿建物遺構として明確になったものである。建物跡のみの検出では、平面形が神社建築様式の何れかに類似するにしても断定するには問題がある。新庄遺跡では、掘立柱建物跡S B 5303の周辺からも神祇祭祀に結び付けられる遺物の出土はみられない。そのため、調査時には当建物跡を神社建物遺構と断定するのは躊躇せざるを得ないというのが正直な思いであったが、敢えて想像を逞しくして文章としてまとめることにした。

最後になりましたが、新庄遺跡の発掘調査でお世話になった南丹市教育委員会および調査に参加協力いただいた調査補助員・作業員・整理員の方々に感謝の意を表したい。また、建物構造について京都府教育庁指導部文化財保護課吉田理氏、南丹市域の神社や祭祀関係資料について南丹市教育委員会社会教育課辻健二郎氏、出土遺物について当調査研究センター引原茂治氏から貴重な教示を得た。記して感謝したい。

(つじもと・かずみ=当調査研究センター調査第2課次席総括調査員)

- 注1 辻本和美「新庄遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第132冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 注2 「おおよしろづくり」とも言う。福山敏男『神社建築の研究－福山敏男著作集4－』(株)中央公論美術出版 1984、『日本の美術 3巻 伊勢と出雲』(株)平凡社 1964
- 注3 大林潤「境外社の造替と建築様式－出雲大社境外社の調査より－」(『奈良文化財研究所2008』奈良文化財研究所)2008
- 注4 『日本の神々と祭り－神社とは何か?－』 国立歴史民俗博物館 2006
- 注5 『塩津港遺跡発掘調査現地説明会資料』(財)滋賀県文化財保護協会 2008、横田洋三「塩津港遺跡」(『発掘された日本列島2008』朝日新聞出版)2008

参考文献

- 『日本歴史地名大系第26巻－京都府の地名－』(株)平凡社 1997
- 『図説・園部の歴史－園部町史通史編－』 園部町・園部町教育委員会 2005

挿図出典

- 1・2・3:「新庄遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第132冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 4・5:福山敏男「山陰の神社建築」(『神社建築の研究－福山敏男著作集4－』中央公論美術出版) 1984
- 6:『日本の神々と祭り－神社とは何か?－』 国立歴史民俗博物館 2006  
(原図:鳥根県埋蔵文化財調査センター編『青木遺跡』パンフレット)

(補記) 新庄遺跡の北西に近接して船井神社が所在する。「延喜式」神名帳に載せる船井郡十座の内の船井神社に比定されている。旧記によれば当社はもと約300m西北の大堰川河畔にあり、洪水の危険を避け現在地に移ったと伝える。現在、天児屋根命を祭神とするが、もと航海の守護に係る住吉三神を祭ったとの記録がある。その後、奈良春日明神を勧請し、「春日大明神」「鹿野森大明神」と呼称されるようになったとされる。当地は「船井」、字「舟枝(ふなえだ)」の地名が表すように、船居すなわち大堰川の水運に係る重要地点に位置付けられる。今回、周辺神社との関連についてはふれなかった。今後の課題としたい。